

600kmを跳び越えて

—自分の思いを伝えた日—



モビリア避難所が閉所して1ヶ月。震災後6ヶ月目を迎えようとする9月10日。すたんどばいみーのモビリアでの子ども支援の「一区切り」をつけるためのイベントが行われました。大人の支援活動のそばで、常に「すたんどばいみーなりの支援活動」を模索し、地道に積み重ねて来た結果の上に行われたイベントだっただけに、「しっとり」という言葉が最も似合うイベントでした。

「すたんどばいみーのつどい」と題されたイベントは、三部構成でした。第1部は10時～11時半。「3月11日とその後」に関わって、モビリアに避難していた子どもたちを対象に行われた「聞き取り」のまとめを、子どもたち一人一人がみんなの前で発表しました。

始めは低学年の発表です。自分たちで書いた小友地区の大きな地図の上に、子ども一人一人の避難の道筋や様子、そのときの気持ちなどが、色分けされたカードで貼られています。すたんどばいみーの西岡歩が質問し、それに答える形で説明が進みます。

「大きな揺れが来たときはどこにいたの?」「津波の時は、どこへ向かって逃げたの?」「お父さんと会えたのは何日たってから?」・・・ゆっくりと丁寧に聞いていきます。もちろん子どもたちは、ことばがまとまらずに戸惑ったり、恥ずかしがったり。それでもその度に、地図に貼られた自分のことばを思い出し、立派に発表できました。

低学年が終わるとその後は、スクリーンに映し出されたひとり1枚の「まとめ」の前で、3月11日とその後の生活を振り返っていきます。何があったのか、どうしたのか、という事実だけでなく、その後の生活や人間関係を振り返ることで、これからどうしていきたいのかまで考えていました。発表が終わると、すたんどばいみーのメンバーがその発表についてコメントしながら、発表者の友達や兄弟にも感想を求めます。指名された子どもたちは、思った以上に、真剣に答えていました。子どもたちの作った地図やまとめは、冊子にして、別れ際に子どもたちひとりひとりに手渡されました。



この1部の中で、すたんどばいみーのメンバーが伝えていたメッセージは二つありました。「いつかまた津波のことを振り返ることがあるだろう。それはずっと大きくなってからかもしれない。そんなとき、この冊子を振り返って、その当時何を感じ、思っていたのかを思い出す手がかりとしてほしい」「避難所で生活する中で生まれた友人関係を、これからも大切に、お互いを支えながら生活してほしい」。この願いは、毎週末、子どもたちとふれあう中で生まれた思いであるのに違いありません。

第2部は14時～15時半。ここでは、すたんどばいみーのメンバーで、モビリアの子ども支援の中心となった6人の作文発表が行われました。この会には、子どもたちだけでなく大人も招待され、保護者、お年寄りの方、そして、モビリア避難所運営の中核であった蒲生さん、さらに、小友中学校の加藤校長先生が参加されておりました。発表さ

れた作文はすべて号外に掲載しましたが、すたんどばいみーの子どもたちの自己紹介、そして、モビリアでの支援活動を通して感じたことが、かれらの言葉と声を通して届けられていました。決して「簡単」とは言えない作文でしたが、作文と一緒に流されていた活動の映像を見ながら、小さな子どもたちがなぜこれほどまでに辛抱強くいられるのかと驚くほどに、子どもたちもその場でおこっていることを身体に刻んでいるような雰囲気がありました。

宮脇英理は、東北道の道すがら、既に作文を書いている段階から、泣けて泣けて仕方なかったそうです。また、そんな作文発表を聞いた母親のひとり、迎えに来た父親に、「ずいぶんと考えさせられた。」と独り言のように行っているのが聞こえました。

第3部は、15時半～16時半。忙しい中、すたんどばいみーメンバーが準備して、神奈川から持ち込んだ母国の料理を囲んでのおやつタイムでした。生春巻き、カンボジアのカレーとデザート、肉まん、杏仁豆腐。ごちそうが並びます。

3部の始まりは、蒲生さんの挨拶から始まり、「津波はつらく悲しいことだけれど、ここでたくさんの人々が出会えたことは、感謝しなければいけない」。そんなすてきな話でも、子どもたちの気持ちはごちそうに吸い込まれそう。その後は早速「生春巻きの作り方講習会?」を受けて、めいめいが挑戦。子どもたちだけでなく、地域の高齢者の方や母親たちも参加してくれて、とても楽しい雰囲気が生まれました。どの料理も人気で、大人にとっても初めて食べる料理が多いからか、「甘さが日本と違う」「辛そうだけれど食べてみるとそんなに辛くはないのね」など、いろいろなコメント付きで料理を楽しんでくれました。なかには、春巻きのたれの作り方を真剣に教わっている姿もありました。支援で知り合い、おうちまで遊びに行く仲にまでなった高齢者の方が、引っ込み思案な仲間を誘って参加してくれたことがとてもありがたく感じるとともに、「孫みたいだね・・・」ということばに、すたんどばいみーが地域に受け入れられていたことを実感しました。



お腹がいっぱいになった子どもたちは、自分の家への「お土産セット」作りに一生懸命です。生春巻きを家族の数だけ丁寧に作り、ラップでくるみます。それに肉まんやデザートを加えて、立派なお土産を作っていました。そんな子どもたちの姿を、優しいまなざしで見つめる加藤校長先生が印象的でした。

人の思いを真剣に受け止め、そして楽しい時間を過ごした集いは、みんなでの片付けの後に記念写真を撮って終わりました。レンズの前に並ぶ子どもたちの表情には、そこにいることの安心感でいっぱいだったように思います。

4月から毎週続けた、陸前高田モビリア避難所での子どもたちへの支援活動。すたんどばいみーは、「自らを、地域の方や子どもたちに語る」ことで、支援の一区切りをつ

けました。しかし、これからも私たちが被災地から問われ続けることには変わりません。「またいつか」、そんな言葉がメンバーの心の中に渦巻いていたのに違いありません。

【すたんどばいみーの震災支援】

すたんどばいみーの震災支援活動は、これでいったんは終了することになりましたが、ここで、かれらの活動を傍らで見守ってきた Ed.ベンチャーの支援隊の一人として、また、日常外国人支援に関わる日本人の一人として、この一連のすたんどばいみーの震災支援活動から見てきたものを整理しておきたいと思います。



すたんどばいみーの活動は、外国人という「マイノリティ」として日本社会の中で管理や支援の対象として処遇されるだけではなく、自らの手で生きる場所を広げていこうとする運動です。それは、自らの意志とは関係なく、本来居るはずだった「自分の（あるいは親の）国」からの移動を余儀なくされ、日本という地で「外国人であること」を無視され、時には日本人にとって分かりやすい「外国人像」を強いられてきたかれらが、そういった自らの外国人としての経験を振り返り、作られた「外国人像」「自分像」を書き換えながら、自分自身の物語を自ら編んでいこうとする営みを通じて展開されています。

そんなかれらが行ったモビリアの子ども達に対する「震災の日」の聞き取りは、子ども達自らが「震災の日」についての物語を編みだしていく手がかりとなる「種」を、子ども達に置いておこうとするものでした。子ども達への聞き取りによりまとめられたものは、つたないながらもその時その時での、子ども達個々人の言葉による「震災の日から現在」に至るまでの物語です。そこには、「被災地以外で語られる被災者像」が介入する余地はありませんでした。「いつか当時のことを振り返る手がかりにして欲しい」というすたんどばいみーの願いが叶うなら、子ども達は自分の発した言葉を足がかりに、新しい自分の物語を編んでいくことになるでしょう。

今回のイベントで、すたんどばいみーは初めて自分達の「外国人」という立場とその活動をモビリアの子ども達に表明しました。それを受け止めるかのように、子ども達は難しい話を一生懸命聞きました。一連の活動の中で、モビリアの子ども達の経験の聞き手としてすたんどばいみーは存在しましたが、同時に、外国人の経験の聞き手として被災した子ども達も存在し、子ども達が語る「ベトナム人」「中国人」の背景には明らかにすたんどばいみーの面々の顔があり、「日本人が望む外国人像」の影は全くありませんでした。そこには、まさに今の日本の中でのマイノリティである「被災者」と「外国人」が、それぞれの営みの中でお互いに繋がろうとする点が生まれつつあるようにみえました。しかし気をつけなければならないのは、すたんどばいみーとモビリアの子ども達との関わりを、マイノリティ同士の「美しい交流の物語」へと回収し、社会の主流から排除するような力も、今の日本社会は強固に持ってしまうということです。

「すたんどばいみーが、被災地の子ども達を支援するとはどういうことか」という問いは、活動を続けながらかれらが問い続けたものですが、それはある種の対立を持って「支援するか／しないか」を巡って浮上していた問いでもありました。モビリアに外国

人の子どもはいないからです。しかし、イベントが終わった後の反省会でチューブサラーンは、「終わったけどスタートしたかも知れない」と語りました。私はこれを聞きながら、「『外国人』にとって『震災』とは」を問うステージに立つかれらが見える気がしました。被災地以外では様々に「震災」「復興」「支援」が物語られます。同様の力関係の中で日本の中で様々に物語られてきた「外国人」として、「震災とどう向き合ってきたのか／いくのか」を、自ら説明付けようとする地点に立ったのではないのでしょうか。これは「支援するか／しないか」を包括するような問いです。

被災していない日本人というマジョリティ側の者として、ここでもう一度襟を正される思いです。震災支援に関わる者が問うべき問題は、「外国人」や「被災者」を同じメカニズムでマイノリティに押しとどめてしまう今の私達の社会のあり方であり、震災支援を通じて、その様な社会を少しでも変えることができるかどうかということなのです。

東日本大震災支援の第3回報告会を行います
10月13日19時～21時 富士見文化会館（大和駅徒歩3分）
当初予定の半年の支援を終えて、これまでの支援の総括すると同時に、今後の支援の方向性を検討するための報告会を行います。
多くの方のご参加をお願いいたします。

【支援隊活動記録 9月7日～9月14日】

■陸前高田支援

○9月10日～11日（第22回）

すたんどばいみーのつどいの開催（モビリア仮設住宅の子ども支援）

□支援隊メンバー すたんどばいみー：チューブサラーン・西岡歩・宮脇英理・伊藤瑞姫・馬場有希（西鶴間小学校）、馬場貴司（玉川大学生）、柿本隆夫（引地台中学校）、家上幸子（Ed.ベンチャー事務局長）、清水陸美（東京理科大学）、石川和友（大和市内国際化協会）、菊地原博（フリーライター）

■ご協力いただいたみなさま（敬称略、順不同、物資・寄付を含む）9/7～9/14

古浦康子、権田和子（元中学校教諭）、藤田武志（日本女子大学）、石井良輔（引地台中学校）、◆すたんどばいみーのイベントに料理提供をいただいたみなさまーボンナ・マカラ（Ed.ベンチャー日本語教室有志）、グエンバンア・宮脇信子（宮脇英理の父母）、伊藤雪玲（伊藤瑞姫の母）

今後の継続的な支援の活動のために広く寄付を募っております。

横浜銀行 中央林間支店 普通6018180

Ed.ベンチャー東日本大震災支援（エドベンチャーヒガシニホンダイシンサイセン）

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

